

物語から心へ吹く風

—小学校国語教科書における語彙調査に基づいて—

加藤 優

1. はじめに

本研究は、現代に伝わる言葉に表象された「日本文化」を「伝統的な言語文化」の教材として取り扱う可能性を見出すことが目的であり、伝統的な言語文化の構成要素の一つである「風」の「日本文化⁽¹⁾」がどのように現在に継承されているのかを、「風」に関する民俗文化を踏まえ、現行の国語教科書の語彙調査を通して追究した。

第一章では、西・藤森(2009)の小学校国語教科書の語彙調査を基に、平成18年度版と平成23年度版の教科書比較調査を行った。その結果、平成23年度版から「風」の関連語彙が上位に上がっていることを受け、「風」の「日本文化」を対象とした「伝統的な言語文化」の授業構想を課題として設定した。第二章では、「風」という言葉に表象される「日本文化」を明らかにするため、「風祭」や「辻」に着目し、民俗文化論的考察を行った結果、「風」は人に「生」も「死」も与える神的存在であり、複数の動線が交差する場所に到来することで「異界」を開く契機となっていた背景が浮かび上がった。第三章では「風」の持つ「日本文化」が現行の国語教科書にどのように反映しているのか考察した。その結果、現行の国語教科書にも、不思議な世界へと誘う「風」の「日本文化」は反映されており、我々の言語生活に受け継がれていることが明らかとなった。

2. 国語教科書における「伝統的な言語文化」語彙調査

2.1 調査の方法

国語教科書において「日本文化」に相当する要素がどのように扱われているのか分析・考察するために、小学校国語教科書5社を対象に語彙調査を行う。なお、18年度版教科書の語彙調査は西・藤森(2009)が行った調査⁽²⁾、23年度版教科書の語彙調査は、藤森裕治(2013)の調査⁽³⁾の概要である。それぞれの調査期間・対象・枠組み・総計は以下の通りである(表1)。

【表1】関連語彙調査の方法 ※出版社はアルファベットで記す

	平成18年度版教科書調査	平成23年度版教科書調査
期間・対象	平成19年5月から11月まで。対象は18年度版小学校国語教科書5社(A・B・D・E・F)60冊(上下別)の全文	平成24年5月から平成25年1月まで。対象は23年度版小学校国語教科書5社(A・B・C・D・E)58冊の全文。
抽出の枠組み	歳時記にないものでも、文脈上、季節に関連する表現とみなすべきものは協議の上で加える。なお、歳時記における該当語句の季節と教科書本文において扱われている季節との間に不一致がみられる場合でも、 <u>分類基準の統一を図るため、データ化の段階では歳時記に合わせた。</u> ただし、非文学等で年月が表示されている場合は新暦の季節に従う。	基本的には18年度版調査と同様である。ただし、23年度版調査では <u>教科書本文の文脈はもとより、挿し絵、図版等も参照し、実際に教科書で扱われている季節を優先させた。</u> 逆に、歳時記に掲載されている語句であっても季節とは何ら関係しない文脈で出現しているものは「無季」に分類した。
一次資料	該当語句総計7191語	該当語句総計28372語
分析資料	総計5436件(表2)	総計11509件(表2)

調査方法としては、「自然との調和・一体感」にかかわる言語表現として、俳句歳時記に掲載されている語彙、すなわち「季語」を指標とし、それに該当する語彙を一件ごとに①出版社・学年・上下②単元名・教材名・ページ・本文③該当語句④文種⑤該当季節(春・夏・秋・冬・新年・無季)⑥語彙総覧の項目で分類、データベース化した。その結果、18年度版調査で

は、「季語に該当する語句を脱文脈的に抽出・分類する調査手法では、計量的なレベルで該当語句の教材文における意味と機能が反映されず、その扱われ方を議論する上で十分ではない」という課題点が浮かび上がった。そこで、23年度版調査では、教科書で扱われている季節を優先して抽出し、教材文における語彙の意味と機能を明らかにすることに重点を置いている。

なお、18年度版の調査対象であったF社は、平成23年度版の教科書を出版していないため、平成23年度版より参入したC社を新たに調査対象とした。A・B・D・E社は平成18年度版から継続して調査対象とした。

2.2 18年度版と23年度版の調査結果比較と考察

18年度版と23年度版の関連語句の総数を比較する(表2)。

【表2】18年度版と23年度版の総計と増加率(年度・文種・会社別)

発行年度	文種	A社	B社	C社	D社	E社	F社	総計
18年度版	文学	598	934	/	834	1007	867	4240
	非文学	263	313		222	188	210	1196
	合計	861	1247		1056	1195	1077	5436
発行年度	文種	A社	B社	C社	D社	E社	F社	総計
23年度版	文学	2189	2310	2282	1170	1609	/	9560
	非文学	474	645	360	279	261		2019
	合計	2663	2955	2642	1449	1870		11579
増加率		3.1倍	2.4倍	/	1.4倍	1.6倍	/	2.1倍

23年度版は18年度版に比べてA社は3.1倍、B社は2.4倍、D社は1.4倍、E社は1.6倍の増加となっている。関連語句数の大きな増加の要因として想起されるのが、現行の小学校学習指導要領(国語)に「伝統的な言語文化」が新設されたことである。「伝統的な言語文化」の学びに直接かわる教材・単元の新設は、少なくとも「日本文化」の関連語彙全体の数値に影響していると考えられる。

【表3】18年度版と23年度版頻出語彙の比較

18年度版	出現数	23年度版	出現数
-------	-----	-------	-----

花	462	キツネ	566
キツネ	405	雪	313
雪	278	花	294
ガン	163	月	258
カエル	137	風	254
クマ	131	クマ	209
ガマ	110	川	204
トンボ・ヤンマ	101	カエル	203
月	94	ウサギ	193
ウナギ	87	春	183
アリ	84	海	181
カブ(蕪)	83	ガン	180
ウサギ	80	空	170
クリ(栗)	69	雨	158
イワシ	62	ネコ	147

18年度版と23年度版の季節に関連する語句を頻出順に並べ、上位に登場するものをまとめる(表3)。23年度版頻出語彙は、18年度版調査と同様、「キツネ」と伝統美の代名詞である「雪・月・花」が上位に位置する。一方、18年度版では上位に登場しなかったものとして、「風」、「春」、「海」、「川」、「雨」、「空」、「ネコ」などがある。中でも「風」は、18年度版では45語だったが、23年度

版では254語抽出され、大きな増加傾向が見られる。また、語彙の種類も18年度版では10種類に留まったが、23年度版では約54種類見られた。さらに、「風」は学年・季節が偏らず、様々な教材の中に登場する。このことから、「伝統的な言語文化」の学習につながる可能性があると考えられる。そこで、本研究ではこの「風」に着目し、「伝統的な言語文化」の指導を構想していくこととする。

2.3 国語教科書における「風」の出現状況

「風」に着目して「物語教材」を通覧すると、ファンタジー等で主人公が不思議な世界に入りこむ、または不思議な出来事が起こる際に「風」が吹く作品が多数見られた。日本国語大辞典(2002)によると、「日常生活の場所と時間の外側にある世界。また、ある社会の外にある世界」を「異界」としている。そこで、本研究では、主人公が普段暮らす世界を「日常世界」、登場人物が入り込む「不思議な世界」を「異界」と表現し、登場人物が「異界」と何らかの接触をする時に「風」が吹く作品をまとめた(表4)。

【表4】「異界」と接触する時に「風」が吹く作品と、「風」の語彙数

学年	上下	番号	教材名	作者	A社	B社	C社	D社	E社	総計
1	下	①	くじらくも	中川李枝子	1					1
		②	花さかじい	松谷みよこ					1	1
		③	天にのぼったおげやさん	みずたにしょうぞう		1				1
2	上	④	黄色いバケツ	もりやまみやこ	1					1
		⑤	かさこじぞう	いわさききょうこ			2			8
	下	⑥	かさこじぞう			2		2	2	
		⑦	名前を見てちょうだい	あまんきみこ					3	3
3	上	⑧	つり橋わたれ	長崎源之助				2		2
		⑨	海をかつとばせ	山下明生	1					1
4	上	⑩	白いぼうし	あまんきみこ	1		1	1		3
		⑪	茂吉のねこ	松谷みよこ	4					4
	下	⑫	初雪のふる日	安房直子	1					1
5	上	⑬	雪女	松谷みよこ	6					6
		⑭	幽霊をさがす	石井桃子翻訳	2					2
	下	⑮	注文の多い料理店	宮澤賢治				3		6
		⑯	注文の多い料理店						3	
6	上	⑰	雪わたり	宮澤賢治		1				2
		⑱	雪わたり				1			
	下	⑲	竜	今江祥智			1			1
		⑳	きつねの窓	安房直子		2		2		4
			総計		17	6	5	10	9	47

何故、「異界」と接触する際に到来するのが「風」なのか。この背景を探るため、「風」が人々にとってどのような存在であり、「日本文化」として継承されてきたのかを確かめる必要がある。

3. 「風」に表象される「日本文化」

3.1 「風祭」における「風」の信仰

人々の中に継承されてきた「風」の「日本文化」を明らかにするため、風祭の記録や「辻」に着目し、「風」に関する民俗文化論的考察を行う。まず、田上善夫(2011)によると、日本では全国の神社だけでも、2000あまりの風の祭祀があり、二百十日付近に行われるものが多い。「風」は人々の大切な作物を壊し、時に人に「死」を与える存在である一方、稲の豊穰や都の繁栄をもたらし、「生」を与える神的存在である。人々は、人に生死をもたらす「風」を「神霊」と崇め、畏れるようになった。そこから各地で「風

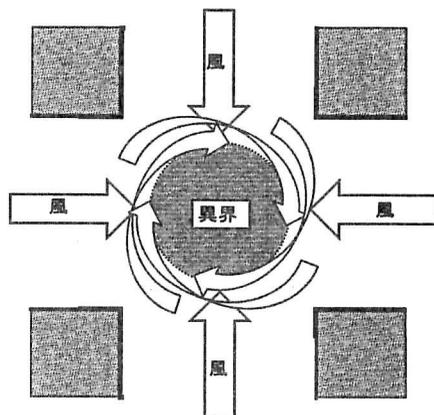
祭」の風習が根付き、命の安全や作物の豊穰を祈願したのである。科学の発達によって「風」への畏れが薄れてしまった地域はあるものの、「風」への畏敬の念は 2000 あまりの「風祭」として現在に伝わり、残されているのである。

3.2 「異界」へと誘う「つむじ風」

「日常世界」と「異界」との境界的空間が開かれる場所の一つに「辻」がある。「辻」とは複数の道が交差している場所であり、「異界」との境界的空間を開き、神霊や妖怪が集まってくると考えられていた。そして、交差する道を「辻」と呼ぶようになる背景には「つむじ風」が関係している。

本来「つむじ風」は、風と風がぶつかり合うことで、「渦」となり、周りの物を引き寄せ巻き込みながら発生する。道路が交差している場所では、四方向から「風」が吹き込むため、風の渦が発生しやすい。そこで、「つむじ風」のよく起こる交差路は、「集む」+「風」の場所として「辻」と呼ばれるようになったのである。

以上を踏まえると、表 4 に挙げた「異界と接触する際に風が到来する」



という性質が、この「辻」から発想 【図 1】 風の到来と異界入口の出現されたものと推測できる。先に「辻」は「異界」との境界的空間を開き、神霊や妖怪が集まる場所であると述べたが、これは「辻」で発生した「つむじ風」が、「風」と共に神霊や妖怪を「渦」の中へ誘うからである。つまり、「辻」に「風」が到来し、「渦」が巻き起こることにより、「異界」へと誘う境界的空間の入口が開かれるのである(図 1)。人々が「異界」に迷い込む時、その入口を開いた「風」を感覚的に感じるようになる。

3.3 「辻」における「輪」の役割と「風」の関係

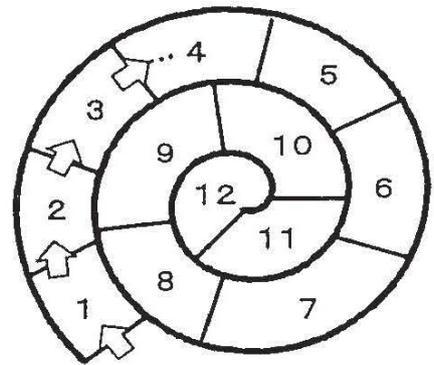
次に、「つむじ風」の「渦」の構造が「輪」と「回転」を伴っていることに着目し、「輪」と「回転」を持つ民俗行事と「風」の関連性を考察する。

(1) 「かごめかごめ」における「輪」と「回転」

「かごめかごめ」は、かつては「輪」の中に入った人に神霊を憑依させて、豊凶を占う「口寄せ」の一つであった。飯島吉晴(1985)によると、この時の「輪」は聖なる空間としての仕切りとして境界を作り出している。宮田登(1985)によると、「かごめかごめ」はすなわち「かがめ、かがめ」を意味し、「輪」の中の人々の体に霊魂を徐々に沈めていくための所作を表している。「かごめかごめ」において「輪」は「日常世界」と「異界」との境界になり、「回転」を伴うことで「異界」が開かれ、霊との交信が可能になるのである。

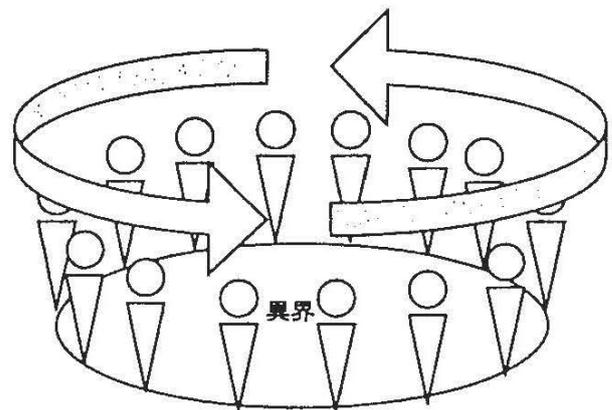
(2) 「渦巻き遊戯」における「輪」と「回転」

「石けり遊び」は、地面に図を書き、石を投げ入れてケンケンで進み、折り返して帰ってくる遊びである。これを、石を移動させながら何周か繰り返す。地面に描く図は「円」や「かかし」、「うずまき」がある。「うずまき」の図では、片足でケンケンしながら「渦」を回り、中心に行き、再び戻ってくる(図2)。この時子どもは「輪」の形を「回転」していく。



【図2】「うずまき」の図

飯島(1985)は、「輪のまわりをぐるぐる回ることや、片足で川などの障害を乗り越えながら渦巻きの中心に行くことは、ともに此世とは異なった世界に参入することを象徴した行為」であると述べている。石けりの「輪」は、「異界＝死」に向かって延びており、渦の形に回りながら「輪」の中心に進むことで「日常世界」とは離れた「死」に近づいてゆくのである。



日常世界

【図3 「輪」の構造と異界の形成】

以上より、「輪」と「回転」を伴う民俗行事は「つむじ風」と同様に「異界」を開く役割を持つと推察できる。藤森裕治(1988)は、こうした民俗行事において「輪」を組むことは「日常」と「異界」との空間的な境を明確にし、「輪」の内部に聖なる空間を形成する境界的機能を果たしており、「回転」動作は、「輪」内部の精霊作用を増幅し、非日常的空間を形成する動的機能を果たしている」と述べている。つまり、「かごめかごめ」や「石けり遊び」は、「輪」を組むことで「日常世界」との境界を作り、さらに「回転」動作によって疑似的に「風」の「渦」を起こしているのである。人々は、「輪」と「回転」で「つむじ風」を疑似的に作り出すことで、「異界」を開き、神霊との交流を行っていたのだと推察できる。

3.4 「風」に込められた「日本文化」

「風」に関する民俗文化に着目し、人々と「風」との関わり方を考察すると、「風」には以下の「日本文化」が表象されていると考えられる。

- (1)「風」は人に「生」も「死」も与える大きな存在であり、神や妖怪として崇められていた。
- (2)「風」は「日常世界」と「異界」の間に境界的空間を作り出す。
- (3)「風」は神霊や妖怪、人を引き寄せ、「異界」へと誘う。
- (4)「異界」との交流のため、「つむじ風」を模した遊戯や祭祀が行われた。
- (5)「風」は「辻」、「山頂」、「村境」、「橋」等の「複数の動線が交差する場所」に到来することによって、「異界への入口」を開く契機となる。

4. 物語教材に吹く「風」

本節では、3で考察した「日本文化」が、現代の言語生活の「風」にどのように反映しているか調査するため、物語教材における「風」の役割について考察していく。対象は、光村図書 of 平成 23 年度版小学校国語教科書の『くじらぐも』(1年下)、『初雪のふる日』(4年下)である。これらの作品を取り上げる理由として、以下の二点を挙げる。

- ①作品の舞台が「現代」であり、児童に身近な言語が用いられている。
- ②平成 27 年度版の小学校国語教科書にも継続して掲載されている。

4.1『くじらぐも』の「風」に表象される日本文化

『くじらぐも』で「風」が到来するのは、子どもたちが「くじら」に乗ろうとジャンプをする場面である。「風」は子どもたちを空へと吹き飛ばす。この時、子どもたちは手をつないで「輪」になっている。

すでに述べたように、「輪」を組むことは、「日常世界」と「異界」との空間的な境界を明確にし、「異界」を開くためのものであった。

子どもたちの「輪」と似た構図であるのが「かごめかごめ」である。「かごめかごめ」は、中に人が入ってしゃがみ、「かがめ、かがめ」と唱えながら回ることによって、「輪」の中の精霊作用を「下へ下へ」しずめていき、しゃがんだ中の子どもに靈魂を一体化させる遊戯であった。

一方、『くじらぐも』において子どもたちが「輪」になって行うのが「くじら」へ向けたジャンプである。「ジャンプ」は、「かがむ」と対の行動であることに着目したい。子どもたちがジャンプすることによって、「輪」の中の力は「かごめかごめ」と逆の「上へ上へ」と向いていく。そして、「輪」の形が作り出す境界に「風」が到来したことにより、「風」は上昇する「つむじ風」の形に変容し、子どもを空へと飛ばすのである。『くじらぐも』においては、子どもたちが作った形が「列」ではなく「輪」であることが必要不可欠なのだ。『くじらぐも』には、「風」が「輪」に到来することで「異界」へと続く「通路」を開くという民俗文化が継承されているのである。

4.2『初雪のふる日』の「風」に表象される日本文化

『初雪のふる日』は、「石けりの輪」を跳んでいた「女の子」が、いつの間にか「白うさぎ」の列に巻き込まれ、さらわれてしまう物語である。

「石けり遊び」で輪の中を進んでいくことは「異界(=死)」への参入を意味している。すなわち『初雪のふる日』において、「石けりの輪」は「異界」へと続く誘導路の役割を果たしているのである。そしてそこに「風」が到来したことにより、「石けりの輪」という誘導路に「異界」への「通路」が開かれてしまう。知らず知らずのうちに「石けりの輪」を進んでしまっていた「女の子」は、「異界(=死)」へと深く入り込んでおり、「うさぎの列」に巻き込まれて戻れなくなってしまうのである。

また、最後には「小さな雪のかたまり」になると語られているように、

「石けりの輪」の先には「死」が暗示されている。通常は折り返す「石けり遊び」が延々と折り返すことなく進むことは、「蘇生(=再生)」が起きないとも言える。終わりのない「石けりの輪」に迷い込んでしまった「女の子」は、「死」に向かって跳び続けなければならないのである。

5. 古典から現在へ一貫する「風」のキーワード

「風」は、神や妖怪として捉えられ、人々に豊作や幸福をもたらす側面と、死や災いをもたらす側面を併せ持ち、人々を「異界」へ誘う境界の象徴としての形象を持っている。

現行の小学校国語教科書に登場する「風」は、このような民俗文化によって継承されてきた独特な形象を下地にし、現代社会における人々を不思議な世界へと誘ってきた。かつての人々が「風」を敬い、そこに「異界」を見出していたのと同じように、現行の小学校国語教科書での「風」の到来は「異界」への通路を開き、人に幸運を与える精霊を連れて来たり、禁忌の場に足を踏み入れた人間を罰することで、人々の心に驚きや喜び、そして恐怖を与えてきた。子どもたちは、「風」が登場する物語を通して潜在的に日本の民俗文化が形成し、継承してきた「風」への敬意、信仰を経験しているのである。このように、「風」の「日本文化」は、様々な伝承や物語によって受け継がれ、現在の言語文化を通して人々の心へと伝わってきたと言えよう。

小学校国語教科書における「風」は、自然の神的存在として崇敬されてきた経緯を基盤として、不思議な世界を開き、そこへ誘う「通路」となることで、人々の心を動かし続けているのである。

6. 今後の課題

今後の課題として、以下の点を挙げる。

・「風」をテーマとした「伝統的な言語文化」の指導計画

小稿では、「風」に着目した教材分析を示すにとどまっているが、他の語彙でも対応できる汎用性を持った単元学習計画を立て、実践することが必

要である。どの程度の成果を上げることができるのか、またどの語彙においても実現可能なのか実証する必要がある。「風」にかかる物語の読みは、先行研究を踏まえることによって多様な解釈が期待できるが、子ども向けの資料や文献でどこまで「日本文化」の学習が可能か未確認である。そこで、実際に実践的検証を行い、子どもの学習成果や研究を観察・分析することによって新たな観点を見つけることができるだろう。

【謝辞】

語彙調査を共に行った石井彬さん、東條ちひろさん、宮城香詠さん、山本万里子さんをはじめ、平成 18 年度調査と平成 23 年度調査の礎を築いて下さった先輩方、同期の信州大学国語教育分野の皆様に、心より感謝申し上げます。

【注】

- (1) 我が国の伝統的な生活様式、美意識、感受性、認識の仕方等と定義する。
- (2) 西一夫・藤森裕治(2009)「国語教科書に埋め込まれた日本文化 —『雪・月・花』と季節感—」(『国語科教育』65,全国大学国語教育学会,pp.19-26)p19
- (3) 藤森裕治(2013)「国語教科書悉皆調査による『伝統的な言語文化』関連語彙の出現状況(自由研究発表)」(『第 125 回全国大学国語教育学会発表要旨集』全国大学国語教育学会,pp.73-76)pp.73-75
- (4) 該当語彙を合わせたもの。
- (5) 該当語彙を合わせると、「手引き・例文・その他」が大量に「無季」に分類されたため、「一次資料」から「手引き・例文・その他」を抜き、「文学(物語・詩歌・古典)」「非文学(説明文)」のみ抽出し「分析資料」とした。
- (6) 日本国語大辞典第二版編集委員会(2002)『日本国語大辞典第二版第一巻』小学館 p.823
- (7) 田上善夫(2011)「風神・風祭 信仰・祭りの対象としての風」(真木太一・新野宏・野村卓史・林陽生・山川修治『風の事典』,丸善出版,pp.16-17)p.16
- (8) 新野宏(2011)「つむじ風」(真木太一・新野宏・野村卓史・林陽生・山川修治『風の事典』丸善出版,p.86)p.86
- (9) 柳田國男(1942)「こども風土記」(柳田國男(1962)『定本柳田國男集第二十一巻』pp.1-68)pp.11-12
- (10) 飯島吉晴(1985)「子供の発見と児童遊戯世界」(坪井洋文(1985)『日本文学大系 第十巻 家と女性』小学館 pp.223-305)P.293
- (11) 宮田登(1985)「妖怪のトポロジー」(小松和彦(2001)『怪異の民俗学③境界』河出書房新社 pp.44-91)p.54
- (12) 前掲,飯島吉晴(1985)p.293
- (13) 藤森裕治(1988)「『輪』の民俗学—盆踊りをめぐって—」(『信濃』第 40 巻第 1 号通巻第 457 号,信濃教育会 pp.19-39)p.30

【引用・参考文献一覧】

- ・新野宏(2011)「つむじ風」(真木太一・新野宏・野村卓史・林陽生・山川修治『風の事典』丸善出版,p.86)p.86
- ・内山節(2005)『「里」という思想』新潮選書
- ・笹本正治(1982)「辻についての一考察」(小松和彦(2001)『怪異の民俗学⑧境界』河出書房新社 pp.34-170)
- ・佐藤宏(2005)『日本語源大辞典』小学館
- ・高取正男(1977)「四辻とあの世」(小松和彦(2001)『怪異の民俗学⑧境界』河出書房新社 pp.95-101)p.96
- ・田上善夫(2011)「風神・風祭 信仰・祭りの対象としての風」(真木太一・新野宏・野村卓史・林陽生・山川修治『風の事典』,丸善出版,pp.16-17)p.16
- ・西一夫・藤森裕治(2009)「国語教科書に埋め込まれた日本文化 —『雪・月・花』と季節感—」(『国語科教育』65,全国大学国語教育学会,pp.19-26)p.19
- ・日本国語大辞典第二版編集委員会(2002)『日本国語大辞典第二版第一巻』小学館 p.823
- ・芳賀綏(2004)『日本人らしさの構造—言語文化論講義』大修館書店
- ・藤森裕治(1988)「『輪』の民俗学—盆踊りをめぐって—」(『信濃』第40巻第1号通巻第457号,信濃教育会 pp.19-39)
- ・藤森裕治(2009)「小学校国語教科書におけるキツネの形象に関する民俗文化論的考察—なぜキツネが教科書に最も多く出現するのか—」(『読書科学』52(2),日本読書学会,pp.83-93)
- ・藤森裕治(2013)「国語教科書悉皆調査による『伝統的な言語文化』関連語彙の出現状況(自由研究発表)」(『全国大学国語教育学会発表要旨集』125,全国大学国語教育学会,pp.73-76)pp.73-75
- ・宮田登(1985)「妖怪のトポロジー」(小松和彦(2001)『怪異の民俗学⑧境界』河出書房新社 pp.44-91)
- ・森本正一(1989)『国語科授業の新展開 53 ファンタジー教材の読み方指導』明治図書出版
- ・柳田國男(1942)「こども風土記」(柳田國男(1962)『定本柳田國男集第二十一巻』pp.1-68)

(かとう ゆう 安曇野市立豊科南小学校)